魔王様は小学生♂

TS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王様は小学生♂

【Ｎコード】
Ｎ７５４４Ｅ

【作者名】
ＴＳ

【あらすじ】
魔王に憧れ魔王を目指す小学五年生の神裂真王（かんざきまお）と、それに振り回される下僕達との年の差ハーレムラブコメ。■全話修正開始　現在２話まで（１１／０１／２７）

序章　将来の夢は魔王様？

将来の夢

五年　二組　神裂（かんざき）　真王（まお）

我には偉大なる野望が有る。
矮小で凡百なる一般市民どもには到底実現不可能であろう。
しかし、我にはそれが出来る。いや、我にしか出来ないと言った方が正しい。
そんな我が野望とは即ち
「魔王」
になることだ。

我の身体能力は人間を遙かに凌駕し、頭脳はもはや人智を超えた領域まで到達している。
そんな我がなるのに最も相応しい存在。それこそが「魔王」である。

世界を支配し、人類からあらゆる物を搾取する絶対悪「魔王」
交渉の道具として世界の半分を差し出す巨悪「魔王」
勇者を侮り個別で四天王を戦わせる少しお茶目な「魔王」
初めから全力で戦えばいいものを第二、第三形態を出し惜しむ「魔王」

絶対的破壊者であり、悪の権化でありながらも遊び心を持っている。
我はそんな「魔王」という存在に見事に心奪われてしまったのだ！
これまでどんな物にも魅かれる事の無かったこの、我が！

「魔王」という存在を知った時の甘美なる快感。
一目見て直感した。これこそが満たされぬ我が心を満たすものであると。

我が「魔王」となれば、奴隷となった人類は我に頭を垂れ、永遠なる忠誠を誓う事だろう。
我が元には毎日のように人共が訪れ、様々な献上物を捧げる。それは、物だけでなく、人であったり、領地であったり、我を楽しませる余興であるかもしれない。
けれど、一度我の機嫌を損ねれば世界は崩壊を迎える。
そんな恐怖と隣り合わせの日常に、次第に疲弊していく人類。
世界中が救いを求める、その時。
立ち上がる者こそ、そう我が永遠の宿敵。
「勇者」

「勇者」は様々な困苦を乗り越え成長していくだろう。
「魔王」はそれを嘲笑うかのように試練を与えるだろう。

お互いが対であるならば必然、二つの存在はやがて邂逅するだろう。
来たるべき最終決戦。これを制した者こそが真なる支配者となることはもはや想像に難くない。

つまり「勇者」を倒してこそ真の「魔王」だ。
物語の中ではけして「勇者」には敵わない。
ならば、我こそが最初で最後の「勇者」を倒した「魔王」となろう。

そこで我は考えた。
どうすれば「魔王」になれるのかを。

そこで、ここには「勇者」を倒し、真なる「魔王」になるための１２９のプランを記そう。

まず一つ目――

＊＊＊

「……え、え～っと神裂君？」

「何だ」

「……先生は将来の夢を書くように言ったはずですけれど」

「書いて有るではないか」

「……冗談ですよね？」

「無論」

本気だ

序章　将来の夢は魔王様？（後書き）

ＴＳの作品を初めて読む読者様には初めまして。ＴＳと申します。
これからよろしくお願いします。
別の連載も読んで下さっている読者様は、どうも有難う御座います。
よく有る様な話ですがお付き合い頂ければ幸いです。

序章をお読み下さり、ありがとうございました。

第一話　計画始動

皆は魔王と聞いてどんな存在を思い浮かべるだろうか？
なに、わざわざ難しく考える必要はない。簡単に考えてもらえばいい。
真っ先に思い浮かぶのはゲームや漫画、小説に出てくる支配者としての魔王ではないだろうか？
悪魔や魔物、魔族の頂点に君臨し人間たちを支配、滅亡させようとする存在。それが一般的な魔王のイメージであろう。

しかし、最近では魔王にも様々なバリエーションがある。
勇者を味方に引き入れる為に世界の半分を取引に持ちかける魔王。
元は人間だが愛する姫や、親友に裏切られ絶望し自ら魔王となった者。
世界を滅ぼす存在を、自らと敵対する者と協力し倒す魔王。
作られただけの、ただ役目として存在する魔王。

魔王と言っても一概に悪ではないというのが最近の風潮だ。
悲しい過去を背負っていたり、平和主義であったりと魔王は千差万別である。

だからこそ人はそんな魔王に憧れる。魅かれる。
その存在に、名前に、圧倒的なる力に、姿形に、言葉に。

これから語るのは小学生にして魔王と呼ばれる存在を目指す少年、神裂真王（かんざきまお）の生涯に渡る物語。

＊＊＊

「……」

とある一戸建て住宅のリビング。そこで我は一枚の紙にびっしりと書かれた文章を読んでいた。書かれていたことを要約すると、“仕事で海外に行きます　父母”

というものだった。

……なに、要約しすぎだと？　それ以外に一切、実の有る内容が書かれていないのだから、我としてはこの一文さえ分かっていれば事足りる。

まぁ、生まれた時から何でも完璧にこなせる我の力を以ってすれば、一人で生活をしていくことに何の不自由もない。それがよく分かっている親だからこそ今回のような行動を取ったのだろう。

それに、このような事は別に初めてではない。

某非営利団体に所属する親達は、よく二人で紛争地域に出掛ける。そのまま連絡もなく一年程帰らないこともあるぐらいだ。

弾丸飛び交う死と隣り合わせの場所だと聞くが、あのバイタリティ溢れる両親がそう簡単に死ぬとも思えないので、こちらの感想としては「またか」程度のものだ。

しかし、紛争地域に小学生を連れて行けないのはわかるが、一年も子供一人を放っておくのは親としてはどうなのだろうか？　普通の子供ならぐれてもおかしくない環境だとは思う。

いちおう親しい隣家の住人に世話を頼んでいるようだが、正直一人で十分なので全く役に立っていないと言っても過言ではない。むしろこちらが世話を焼いているような……。

我のいる環境は、子供の成育に適さない人材ばかりだが、両親の性格を熟知している身からすれば、これが両親の精一杯なのだろう。

……まぁ、無事ぐらい祈っておいてやるか。ふん。

＊＊＊

今はもう慣れてしまった、音もなく我以外誰もいない広いリビング。それをざっと見渡して思案にふける。
思い至るのは、以前より練っていた計画。かつて、我が記した「魔王」へ至る計画。
すでに下準備は始まっているが、肝心のプラン1は実行されていない。
それを実行に移す良い切っ掛けではないだろうか。
思い立った我は自室に戻り、通帳、鍵、携帯など重要な物を小さな鞄に詰め込んでいく。
鞄の中を確認し、最後に家の戸締りをして外へ向かう。
それでは、我が野望の第一歩。プラン1を実行に移すことにしよう。

「さて、行くか」
我は日が昇ったばかりの空を一瞥すると、目的地へ歩き始める。
目指すは計画の拠点となる我が下僕の家。
もちろん、事前の連絡など無いが問題はない。
突然訪れた我を見たときの間抜けな下僕の面を想像し、口を邪悪に歪めた。
くくく、何も知らない愚かな下僕よ、せいぜい今の内に平穏を楽しんでおくことだな。
「待っていろ、我が下僕よ！」
貴様に平穏な日常など無いということを嫌という程、理解させてやろう。

第一話　計画始動（後書き）

まだ物語は始まっていません。次から本編のようなものです。
とりあえず、始まったばかりですが読んで下さった皆様ありがとうございます。

第二話　魔王強襲

鳥たちが囀（さえず）る早朝。我は一人、腕を組み立っていた。
今我が立っているのは、とあるマンションの扉の前。そう、今後の活動拠点となる場所、下僕の一室だ。
おそらく、この時間ならば我が下僕もまだ中にいるであろう。

インターホンを鳴らし、下僕が出てくるのを待つ。
あの馬鹿は警戒心というものが無いのか、誰であるか確認もせず扉を開ける傾向がある。
普段なら不用心だと叱るところだが、こういったサプライズの時は非常に便利だ。

不敵な笑みを浮かべながら、待つこと数秒。
鍵を開ける音。
ドアノブが回る。
扉が開く。
中の人物と目が合う。

停止。

驚いた表情で固まる下僕の腕をすり抜け、中に侵入。

「ってええええぇぇ！？　な、なに勝手に中に入ってるんですか！？　というかなんでここにいるんですか！？」
目を丸くし驚きの余り叫ぶような声を上げる女。もとい下僕。
歳に似合わずやや幼い顔に、寝起きなのか色気のない動物柄のパジャマを着ているが、はち切れんばかりの胸は大人の色気を醸し出している。

……いや、嘘だ。
確かに凶器とも言える二つの膨らみは脅威だが、警戒心の薄い子供のような行動。滲み出る頭の悪そうな雰囲気が全てを台無しにしている。
要するに首から上と胸は人並み以上だが、それ以外はご愁傷様といったところだ。

それにしても、見事に想像していたとおりの反応だったな。
さて、下僕がまだ慌てているので疑問に答えてやるか。

「なぜ？　当然、貴様が我の下僕であるからに決まっているだろう」
「……自信満々に言ってますけど、いつ私が神裂君の下僕になったんですか」
「貴様と出会った、その瞬間からだ」
「……はぁ」
下僕のくせに溜息なんぞをつきやがったので軽く睨んでやると、びくりと体を震わせたものの負けじと睨み返してきた。生意気だ。
といってもこいつに睨まれたところで全く迫力も何もないのだが。
下僕は涙目になりながらも必死に反論をする。

「だ、大体失礼だと思わないんですか！　私は神裂君の担任ですよ！」
ぷんぷんと真っ赤になった頬を膨らませて主張している、この残念な大人が我の学校の担任だ。
名前は宮前静香（みやまえしずか）。雰囲気こそ馬鹿っぽいが教職を持っていることからも分かるとおり、勉強はそれなりに出来る。まぁ我には劣るが。
ただ頭のネジが二、三本弛んでいるせいか、若干とろい。

「思うわけが無いだろう、馬鹿。むしろ貴様のその無礼な態度の方が充分失礼だろうに。主が帰還したのなら跪き労をねぎらうのが下僕の勤めだろう？」
「だから、いつ私が下僕に……。うぅ、どれだけ言っても無駄ですよね……。それで、今度は一体どんな要件なんですか？」
無駄な抵抗を諦めたのか、下僕の割には理解が早い。
学校も始まるし、下僕で遊ぶのは中断し手短に済ませてやろう。

「今日から我もここに住む」
「……は？」
馬鹿みたいに口を開け、目を見開く馬鹿。
ただでさえ間抜けな面が、今では五割増しだ。

「え、え～っと、冗談ですよね？」
「無論。本気だ」
以前されたような質問に対し、同様に答えてやる心優しい我

「む、むむ無理ですよそんな！　親御さんがそんなの許すはずありませんし、人を一人養うということはとっっっても大変なことなんですよっ！」
声を荒げ正論を言う下僕。だが、正論程言われてつまらんものは無い。
我が相手を論破する分には一向に構わんが。

「ふむ、安心しろ。親は今仕事で海外にいる。金の問題もほれ」
そう言って家から持ってきた通帳を開き下僕に見せる。
下僕の顔が訝しげなものから間抜け面へと変貌していく。

「一、十、百、千、万、十万、百万、一千万、いち……うぇえええええ！　なな、何ですかこの額は！？　えぇ！？　だって、え、え

えええええ！？」
遂に日本語さえまともに話せなくなった哀れな下僕。
おそらく、こういう反応見せるであろうとは予想していたが、本当に外さない奴だ。
ついでに、もう一つ爆弾を投下してやる。
「後、それは親の金ではなく株運用によって我が作り上げた金だ。安心して使うがいい」
今度は魚のように口を開閉する下僕。忙しない奴だ。
「……はぁ。まぁ、事情は一応分かった事にしておきます。でも、なんで私なんですか？　そういう時は親戚とかもっと信頼できるところのほうが……」
「我にはそういった親戚の類はいない。わずかなりとも世話になっている者ならばいるが、そこではあまり自由に振る舞えないしな。気兼ねなく振る舞えるという点では下僕の住居が最も適しているだろう？」
「なんて、滅茶苦茶な……。う～ん、でも生徒と一緒に住むのは先生としてはどうかと……」
う～んと何度も唸りながらも、まだ決断しない下僕。なんと愚鈍な。
カバですら意外な俊敏さを見せるというのに。
……仕方ない、諦めるか。
こいつに判断を委ねるのは。
初めから逃げ道を無くせば良かったのだ。慣れない仏心など出すものじゃないな。
どちらにせよ、このお優しい下僕は我の提案を断ることなど出来

はしないとわかっている。ならば、さっさと我が住むことを無理やりでも理由づけてやればいい。
そうと決まれば、まくしたてるように嘘八百を並べ立てる。

「なるほど。つまり世間体を気にする下衆な下僕は、庇護者である教師を頼る哀れな一人の生徒を見捨てようと、そういう考えな訳だ。まぁそれもいいだろう、今後の我は様々な苦難を味わい、誰かに頼ろうにも一度見捨てられた可愛そうなでか弱い一生徒は、誰にも相談出来ず、人生に絶望し人を信じられなくなり、その後の人生は地を這うような惨めなものとなるだろう。しかし、我は一切下僕の事を恨んだりはしないぞ。矮小なる下僕の残虐非道なる決断は今の現代社会では当然とも言える処断であるし、たかが一生徒の人生など教師からすれば過ぎ行く通過点程度の認識だというのはわかっていたことだ。ただ残念なのは信頼していた優しい教師というものが他の腐りきった教師どもと変わらなかったという事実であり、生徒を見捨てたという事実は未来永劫消えることなく汚点として残り続け矮小な良心によって死ぬまで責苦を」
「あぁっ～もうっ！　分かりました！　ここに住めばいいでしょうが！　一年だろうが十年だろうが好きなだけ住んで下さいっ！」
やけになったように承諾する下僕。
別に我の言ったことを信じたわけではなく、経験則からこちらが毛頭も諦めるつもりがないことが伝わったのが一番の要因だろう。
なんとも下僕らしく甘い判断に、にやりと我は笑う。

「その言葉に偽りはないな？」
「はいはい、ほんとですよっ！」
「うむ。言質は取らせてもらった」
「へ」
そう言って我はポケットから録音機器を取り出す。

「好きなだけ住んでいいとは太っ腹だな。ありがたくそうさせてもらおう」
唖然と立ち尽くす下僕を尻目に部屋に上がり込む。
別に脅迫したわけでも、心の底から納得させたわけでもない。
けれど、この押しの弱い教師に、一度でも認めてしまったのならば仕方ないと思わせられれば充分だった。
重要なのは切っ掛けだ。ならば納得させる口実が嘘でもかまわない。
何も録音されていない録音機器を仕舞い込み、見慣れた部屋を見渡す。
これで活動拠点が手に入った。

＊＊＊

ようやく、驚きから抜け出したらしい下僕はこんな事を聞いてきた。
「…どうしてわざわざ、学校が始まる前に言いに来たんですか？学校が終わってからの方が時間もあったでしょうし」
なんだ、そんな事か。
「善は急げというだろう？　それに、だ下僕よ。朝からこんなハプニングで憂鬱な気分ではないか？　これで今日は一日中、我の事を考えながら過ごさなければならないな。我から下僕へのささやかなる謝礼だ」
地面に崩れ落ちるように、うなだれる下僕。
非日常は突然訪れ平穏を打ち壊す。

そう、まさしく今の我のようにな。

第二話　魔王強襲（後書き）

展開がかなり遅いです。
今日アクセス数を見たら結構増えてました。
読者様が魔王に惹かれたのか、小学生♂に惹かれたのか、ハーレムに惹かれたのかが気になるところです。
これから、どういった展開になるか分かりませんがお付き合い頂けると大変嬉しいです。
読者の皆様、ありがとうございます。

第三話　大言壮語

下僕の車に乗り悠々と登校を果たした我。
初めは徒歩で行くべきだと主張していたが、
学校で、ここに住むことをうっかり言ってしまいそうだ。
そう言った瞬間、快く車を出すのに同意した。
下僕の分際で我に逆らうのは百年早いわ。
百年後に言ったとしても同じ事を言うだろうが。

学校の裏で下ろされた我は下僕に

「絶対言っちゃ駄目ですよ！先生信じてますからね！絶対ですよ～！」

と、やけに念を押された。
信用しているのなら言う必要などないだろうに。
あれでは煽っているも同然だ。
なんだ、これは前振りか何かなのか？
ならば、その期待に応えなければな。

まぁ、今はその時期ではない。
もっと熟成したころに暴露するのが最もおもしろ、もとい効率的だ。
その時の事を想像し、邪悪に我が口を歪めながら正門に向かった。
正門には我を出迎える為、膝を付き頭を垂れる者共が列を成してい

た。

我はそのまま、両脇に跪く者達の間を悠然と歩いてゆく。

こいつらは我自らが選別し、我に忠誠を誓っている尖兵達だ。
我の命令一つであらゆる任務を忠実にこなす。
それだけの能力を有する者達であり、そこには年齢も性別も関係ない。
今ここにいるのは小学生のみだが、学外にもこういった存在はある。
我は一度も振り返らず、労う事もしない。
なぜなら、我が奴らにすべきことはそんなことではないし、奴らも望んではいない。
奴らにすべきことは、我が野望の実現という形でのみ果たされるのだ。

我は下駄箱で靴を履き変え教室に向かう。

我が教室に入った瞬間、数人が頭を下げ、挨拶をする。
それに手を挙げ応じ、我の席に向かう。
尖兵達と対応が違うのは彼らは配下ではなく、ただのクラスメートだからだ。

我が席に着くと同時に話しかけてくる者がいた。

「お早う御座います、真王様」

彼女は、山野瀬（やまのせ）　基（もとい）

我が野望の参謀であり、我の気の置けない存在である。
同年代の者より成熟した知能を持つ。
それが雰囲気にも滲み出ており、大人びた容姿に更なる拍車を掛けている。

何処ぞの下僕も基を見習うべきだな。

「ああ、お早う基。それで、進行度はどの程度だ？」

「ええ、真王様の言い付け通り３０％程度に止めておきました。
なので、後は反対派が２０％、中立派が５０％といったところです」

現在、基に与えている任務は学内の人心の掌握である。

これは、一か月程前から与えてある任務であり、我が野望への足掛かりでもある。

つまり、既に３０％の人間は先程の尖兵のように我に忠誠を誓っているという訳である。

「しかし、真王様。少し奴らに温情を与えすぎではないですか？
現に反対派の奴らの活動により中立派も引き抜かれているようですし・・・」

確かに反対派は初め、ごく僅かだったが今では２０％にまで拡大している。

万全を期したい基にはそれが納得いかないのであろう。

「それに真王様が選ばれたものの中には野心の強い者や、我の強い者も混じっていました。

真王様のお考えが深遠なのは存じておりますが、私に説明をして頂けませんか？」

確かに説明不足だったやもしれんな。

尖兵候補のリストを深く説明しないまま渡していただけだったからな。

基にはある程度理解してもらった上で行動してもらった方が効率も良いだろう。

「簡単に言ってしまえば、知っていて我が尖兵に加えた。

理由としては、我が面白くないからだ」

理屈屋の基にはあまり理解出来ることではないのだろう。

顔に疑問が浮かんでいる。

「正直に言えば学校中の人心の掌握など一日で終わることだ。

一か所に全校生徒を集め我が演説をするだけで事足りる。

ただ、それでは自ら思考することなく、我に付き従う人形のように

なるだろうな。

少しづつ我という存在を知らしめて行けば、そういった事になりはしない。

様々な人間がいてこそ支配する意味があるというものだ」

我が欲しいのは人形の世界ではないからな。

「反対派に関しても同じだ。潰すのは簡単だが、

潰してしまうには惜しい人材達が揃ってきている。

異なる環境では、同じ人間でも成長過程に違いが出る。

だから、尖兵より反対派にいた方が良い人材は、

尖兵達が傷つけないように、既に保護対象にしてある」

他にも、わざと中立のまま放置する事で反対派に引き抜かせ育てさせる。

また、中立派のままの方が成長が見込める者は引き抜かれないようする。

逆に、反対派から中立派に戻るように誘導等もさせていた。

「そうして人材を育てて行けば、やがて味方に引き入れたときに
多種多様な人材が我が下に揃う。これが任務の概要だ。
これで理解はしてもらえたか、基？」

「理解はしました。しかし納得できるかは別問題です。
確かに傀儡ばかりでは役に立たないでしょう。
しかし、その作戦は不確定要素が多すぎます。
下手をすれば真王様に危険が――――」
納得がいかないのであろう基は更に言い募ろうとする。

だがな基

「誰に口を聞いている、基」

「…！」

「お前は我が野望を知りここにいるのであろう？
その、お前がこの程度の事で騒いでどうする。
基、お前は我が信用できないのか？」

「そ、そんなことは有りません！真王様の事は誰よりも信じております！」

身を乗り出し否定する基。

「ふむ、そこまで言うのなら結果で示してみろ基。

とりあえず、全校生徒の今後の所属等を纏めておいた。

そのリスト通りに計画を進めて見せろ」

尖兵達には口頭で伝えてあるが、

基には信頼し、リストを渡す。

まぁ、これが反対派に流出したら真っ先に基を疑う事になるだろうがな。

…それもまた一興だな。

我はその事は口に出さず、代わりのことを伝えた。

「例え、我が全生徒、全教員を敵に回したとしても、

我の一方的な勝利という結末に一切の揺るぎは無い。

例えお前が敵になったとしてもそれは例外ではない。

肝に命じておくがいい、基」

気圧されたように、一歩後ろに下がり頷く基。

釘は刺したが本音を言えば、我に意見した基は大変好ましい。

我の側近なのだ、それぐらい骨が無くては務まらない。

だから、基は我の一番の配下であり、親友である。

例え我を裏切ったとしても…

それもまた一興だ。

第三話　大言壮語（後書き）

何か真面目っぽい話になってしまいました。
話を考えるのが苦手なので基本思いつきで書いています。そのせいか、設定が浅いです。
キャラだけでなんとかせずに頑張りたいです。

第四話　女心と秋の空

そういえば、と朝の事を思いだす我。
基には現在、我が下僕の家に住んでいる事を伝えておいた方がいいだろう。
連絡などで行き違いがあれば困るしな。

「基、実は今朝面白いことが有ってな」
そう続けようとして

「神裂真王っ！！」
騒がしい声に妨害をされた。
一応誰かは分かっているが、仕方が無いので声のする方に目を向けてやる。

「あんた、木葉に何したのよ！」
大声でこちらに歩いてくる女。
こいつは　下村（しもむら）　真琴（まこと）。
我がクラスメートであり、そして

「我は何もしていないが？」

「そんな筈が無いでしょ！木葉がリーダーである私に、何も言わず反対派を抜ける筈が無いんだから！」

真琴は反対派のリーダーである。

日本人離れした容姿と人を惹き付けるカリスマ性。

その二つを併せ持つ真琴は、我に反発し反対派を作り、同志を増やしていった。

「言い掛りもいいところだな。木葉とやらは真琴と反対派に愛想を尽かし辞めたのではないか？」

実際は真琴の言う通りなのだが、とぼけておく。

「そんな訳、有る筈が無いでしょ！

それに、馴れ馴れしく真琴なんて呼ばないでよね！

あんたは私の敵なんだから！

…大体、あんた本気なの？

“魔王”になる

だなんて、そんなのただの妄想でしょ。成れる筈が無いのよ」
馬鹿にするように言う真琴。
…なれる筈が無い、か。
では
「本当にそう思うか」
真琴の眼をじっと見つめ言う。
「っつ」
真琴が息を呑む。
「お前は我が魔王になれないと本気で思っているのか？」
「っく……えぇ、そうね。悔しいけど認めるわよ。
あんたなら魔王とやらになる可能性があるってね。
でも、でもね！そんなの私が許す筈が無い！
私が絶対にあんたのその、馬鹿げた野望を阻止してやるんだから！」

認めはしたが鼻息荒く宣戦布告する真琴。

本当に正義感の強いやつだ。
だからこそ、真琴はこちらに取り込まず、反対派のリーダーをさせている。
そう、全ては予定調和だ。

真琴を勇者にするためのな。

「ふむ、そこまで我のことが嫌いか？」

真琴が反発する理由は知っているが、あえて茶化す。

「あったりまえでしょうが！あんたなんて大っ嫌いよ！」

怒りで顔を赤くしながら言う真琴。

嫌いなのは知っているが大嫌いとまで言われると面白くないな。

「我は好きだがな」

「……ひぃえ！？」

我の言葉に変な奇声を上げる真琴。

「その美しい容姿も我の好むところだが、
真琴が我に反発するところも大変好ましい。
なにより魅力を感じるのは、その強い意志を宿した双眸だ。
思わず引き込まれそうになる程の新緑の瞳はとても美しい」
我がそう手放しで褒めてやると、次第に顔を朱に染めていく真琴。
言われ慣れている筈であろうに、毎度毎度我の言葉に反応してしまう。

まぁ、まだ子供なのだから、それも仕方が無いのかもしれないな。
更に我は、混乱して無防備になった真琴の手をそっと引き寄せる。
「そんな愛おしい真琴に、我が印を付けること許して欲しい」
そう言って、真琴の手の甲に優しく我の口を落とす。
「ひょわぁぁぁぁぁあ！？」
我が口付けた瞬間、顔を真っ赤にした真琴は、手を振り払い飛び退った。

「おぅ、ぉぅ、お、おっ」

驚きの余り言葉にすらなっていない言語を発する真琴。

オットセイにでもなったのか？

「お、覚えてろよぉぉぉぉぉ！！」

真っ赤な顔のまま捨て台詞を残し教室から出ていく真琴。

授業が始まれば戻って来ざるを得ない筈なのに、ご苦労な事だ。

真琴が出て行った扉を楽しそうに眺めていると、なにやら冷たい視線を感じた。

「…」

「…なんだ基」

なぜか我の事を冷めた目で見る基。

「真王様。御寛大なのは結構ですが、

敵のリーダーと親しくしすぎるのは好ましくありません」

基は真面目な性格ゆえ敵対者と親しくすることを好まないようだ。
真琴と話しているだけで機嫌が悪くなる。

「なに、敵対者同士の前哨戦のようなものだ」

喧嘩を売ってきたのはあちらだが、見事我の勝利に終わったな。

「その割には随分と楽しそうでしたね。

好きだの何だの仰った上、キスまでなさるなんて、

・・・真王様はそんなにあの女がよろしいのですか？」

初めはどこか不機嫌そうだったが次第に不安そうになっていく基。

そうか、基も女の子なのだ、真琴の美しさに自信を失っているのかもしれない。

基には基の良さがあるというのに。

「我は基のことを好ましく思っているぞ。

それは参謀としてだけではなく一人の女性としてだ。

だからな、そんな風に不安そうにしていたら、

我の好きな、基の可愛らしい顔がくすんでしまうぞ？」

俯く基の顎に手を当て面を上げさせる。

我は基の不安を取り除くため視線を交え真摯に言う。

基は雰囲気こそ大人びているもののそこはまだ小学生であるので、綺麗というよりは可愛い顔をしている。

それは真琴と比べるものでもないし、比べていいものでもない、基だけの魅力である。

基の不安は取り除けただろうか？

そう思って顔を窺うと

段々と顔が真っ赤になっていき

「っつ！・・・！！・・・・ぅぁ！！！」

物凄いスピードで教室の外へ走って行った。

…ひょっとして怒らせたのか？

女心というものは難しいものだな…

第四話　女心と秋の空（後書き）

今のところは同年代の方がヒロインは多いですがこれからは年上が増えていくと思います。
年上を手玉に取る魔王様が書けるように頑張りたいです。
読者の皆様、次の話でお会いしましょう。

ありがとうございました。

第五話　縋るもの

授業が始まるころに、のこのこ帰ってきた二人。
真琴は我を睨むように一瞥、基は俯きながらゆっくりと席に着いた。
お前たちは、いきなり置いて行かれた我に何か言うことは無いのか？

「は～いっ、皆さ～んおはようございま～す。静香先生ですよ～」
まるで幼稚園児に対するような挨拶をし、入ってくる下僕。
イラッときたのは我だけか？
聞いていて、あの能天気な頭に杭でも打ち込んでやりたくなる。
おそらく、鳥よりも忘れやすいプリンみたいな脳の下僕の事だ、
もう今朝の事をすっかり忘れているのであろう。
それでは面白くないのでじっと下僕を見る。
我の視線に気付いたのだろうこちらを見る下僕。
我を見た瞬間、今朝の事を思い出したのか分かり易く項垂れる。
「…えっと、連絡は特にないです。一時間目の準備をして下さい…」
滅茶苦茶テンションの下がった下僕。

自らの私事で生徒への対応を変えるとはな。
全く、公私混同とはとんだ駄目教師っぷりだ。
…下僕のあの時の顔だけで一時間は笑っていられるな。

その後は、さして特別な事もなく全授業を終えた。
一時間目は笑いを堪えるのが大変だった事しか記憶にない上、
それ以降の授業も、教科書全てを暗記している我には何の意味もない。
なので授業は、下僕に我の野望を叶えるためと称し、どう可愛がってやるかを考えるよい時間となった。
それ以外の時間も、いつも通り真琴を適当にからかって遊んでいたぐらいだな。

さてと、帰りの挨拶も済んでする事も無いから帰るとするか。
残っていても、やる事は下僕いじめぐらいだからな。
楽しみは後に取って置くか。
下僕の悲愴な顔が眼に浮かぶな。
まぁ、実際にはやる事を探せばいくらでもある。

勢力の拡大などは我が直接やればすぐ終わる事だ。
だが、魔王たるものそういった仕事は配下の者にまかせるのがベターだろう。
（本音は我自身がやると結果が分かりすぎて面白くないからだ）

我も尖兵達には、学校が終わってからのそういった活動はしないよう言い含めてある。
我には配下達の自由全てを奪うつもりは無いからな。
そのため、主な活動時間は休み時間に限られてくる。
尖兵達や基は優秀なので僅かな時間で効率的に行動し、多大な成果を上げている。

学校の時間が活動の時間。
それは我の中だけのルールみたいなものであり、
それをきっちり順守している我は、さっさと帰りたいのである。
別に、早く帰ってネットで魔王情報を収集したいからではないぞ？
…本当だぞ？

寄り道をせずに真っ直ぐ一人で帰る我。
共に帰る人がいないのではなく、誰にも付いて来ないように言ってある。
ゾロゾロと人を引き連れて歩く趣味は無いからな。

基一人くらいなら問題ないが、残念ながら家は逆方向だ。
言えば着いてくるだろうが、そこまでする程の事でもない。

そんな風に基の事を考えていると、
今朝の事を話すのを忘れていたことに気付く。
だが、そういう面白い事は直接言ってこそ意味があり、メール等では味気がない。
では、明日の楽しみにしておくか。

等と考えながら公園を横切る我。

そんな我の視界に一人の人物が映り込んだ。

ブランコに座っている、ＯＬの装いをした女だ。
その女は物憂げな表情でブランコを揺らしていた。

これ程陰鬱な空気を放てば、誰も公園を利用したがらないであろう。
何という目障りではた迷惑な女だ。

…だが、我の配下に加えれば面白いかもしれないな。

そう判断し女に近づいていく。
女は我に気付き顔を上げた。

「…何か用？」

どう見ても可愛らしい小学生の我に向かって、そのようなぞんざいな言葉を吐くとは、

ますます欲しいな。

「…」

しかし、我は無言で見るだけだ。
それ以外に何かをする必要は無い。

「…何なのよ、一体。

あんたも私を馬鹿にしたいの？」

もちろん、我には馬鹿にする気など毛頭ない。
しかし、女の眼にはそう映らなかったようだ。

「っつ！そんな目で私を見るんじゃないわよ！

憐れんでるつもりなの？みすぼらしい私の姿を見て、

同情でもしたの？っつ―――何とか言いなさいよ！」

声を荒げ喚く女の姿に何の感情も湧き起こらない。

被害妄想にかられた女は、勝手に我の感情を想像し自らを曝け出していく。

「何なのよ…皆して私の事を嘲って…そんな事して何が面白いの？
私が何をしたっていうの？ねぇ、答えてよ……答えなさいよ！！」
今にも掴み掛らんばかりの様相で我に答えを求める。
我はそれに対しても沈黙で返す。我が答える必要など無い。
なぜなら沈黙こそが、この女の真に望むものだからだ。

「私はどうすればよかったの？私はただ皆の役に立ちたかっただけなのに。
だから、一生懸命仕事に打ち込んで…なのに、皆に人気の上司に告白されて
私はそれを断っただけなのに…たったそれだけなのに」
黙す我に女は語り出し始めた。

「突然、皆の対応が変わった。無視されるようになって、嫌がらせを受けるようになった。
会社中に変な噂を流されて、男の人からも気持ちの悪い眼で見られるようになった。
私に告白した上司も、君がそんな人だとは思わなかった。だってさ…
あはは、勝手に理想を押し付けておいて幻滅してんじゃねーよ…ほ

んとに…さ」

女は糸が切れたように地面に座り込む。

「ねぇ、あんたにさ私の辛さが分かる？分かる訳ないよね…

あんたみたいなガキにさ」

どうやら、女の言いたい事はそれで終わりのようだった。

女の事情を理解した我は沈黙を破り答える事にした。

「分かる訳が無いだろう。我はお前では無い。何を惨めにも期待しているのだ？

お前は自分の無力さを棚に上げ、我に縋ろうとしているだけであろう」

我は女の下らぬ願望を一蹴する言葉を投げ付ける。

女は我の言葉に反応し掴みかかる。

その形相は怒りで満たされ醜く歪んでいた。

「ざっけんじゃないわよっ！縋る？何も出来ないあんたに、私が縋る筈が無いじゃない！」

我に掴み掛った腕に更なる力を込める。
自身でも言葉では敵わないと悟っているかのように。

「そうだな、確かに我にはお前の会社環境を改善することは出来ない」

実際にはその程度の事は可能だが、あえて嘘を言っておく。

「だがな、お前自身を変える事は出来る」

我の言葉に訝しげな顔を作る。
しかし既に女の腕は外され、我の言葉を一字一句聞き逃すまいとしていた。

「お前はずっと誰にも相談できず、悩みを一人で抱えてきたのだろう？

だから、我のような小学生にすら話を聞いてもらいたくなった。

それで？今の気分はどうだ、前より軽くなったのではないか？」

驚き、呆然と我を見る女。その表情からは先程の激情は全く窺えない。

我はそれに満足し、女に笑いかける。

「見ず知らずの小学生に話しただけでそこまで変わるのだ。
ならば、より親しい仲ならば更なる効果が望めると思わないか？」
その言葉に対して女は顔を俯かせた。

「…そんな人いる訳ないじゃない。いたら、とっくに相談してるわよ」
何とも侘しい人生だな。
ならば我がその人生を綺麗に彩ってやろう。

「ならば親しい人間を作ればいい」
「っつ！そんな簡単に――――」

「我がなる」
「えっ？」

「我がお前の支えとなる。愚痴を吐きたければ話を聞く。
どうすればいいか分からなければ相談に乗る。

何か困った時は我がお前の助けになる。それならどうだ？」
女は我の言葉に唖然とし、口を開けたまま動きを止めた。
我は何も言わずそのまま女の返答を待つ。

「…で、でもあなた小学生でしょ？どうしてそんな事を…？」
「それこそ、どうでもいい事だ。大切なのはお前が我を望むかどうかだ」

そう言って女をじっと見つめる。
打算も裏も一切無い。
今の我にあるのは、この女の力になる。
その思いだけだ。

「……あはは、私も相当末期かもしれないね。
だって、こんな小学生に頼ろうとしてるんだもん」
そう言う女には清々しいまでの笑顔が浮かんでいた。
思った通り、笑えばとても綺麗な顔をしている。

「我は神裂真王だ。お前は？」

「私は雨宮（あまみや）　楓（かえで）。…ねぇ」

「何だ？」

「真王ってすっごい偉そうだよね。何様？」

笑いながら楽しそうに聞く楓。

だから我も笑いながら返してやった。

「魔王様だ」

第五話　縋るもの（後書き）

ようやく年上のヒロインを増やせました。
多分次の話でも年上のヒロインが増えると思います。
出来れば楽しんで頂ければ幸いです。
それでは、ありがとうございました。

第六話　公園での語らい

そろそろ日も暮れようかという時間、我と楓は二人でブランコに座り話していた。

「魔王様か～、なるほどねぇ」

普通なら小学生がそんな事を言えば、ごっこ遊びか妄想癖だと思うのだが、
なぜか、「うんうん」と頷きながら納得する楓。

我が疑問に思っていると、それに気付いた楓が続きを話し始める。

「なんだかさ、あの時真王が力になるって言ってくれた瞬間、身体がふっと軽くなったんだよね。
確かに私は誰かに縋りたかったのかもしれない。でも、それだけじゃ真王に頼ろうとは思わないよ。
真王なら信じてもいい。初対面なのにそう思わせるだけの何かが有ったんだ。
…だからかなぁ？魔王って聞いてすっごく成程って思ったんだよね。
そもそも、真王って全然子供っぽくないしね」

にしし、と子供みたいに笑う楓。

辛いことが楓の心を閉ざしていたが、本来は今のように明るい性格だったのだろう。
先程とは比べ物にならないほど、その笑顔は生き生きとしていた。

「子供らしくない、か。一応、褒め言葉として受け取っておこう。
だが、楓には悪いが我はまだ魔王ではない。魔王を志す普通の小学生だ」

日本すら支配していない内から魔王を名乗るなど魔王の名折れだからな。
少なくとも世界の各国が、我に危機感を覚える程度の存在でなければならない。

今は魔王駆け出しといったところか。
まだまだ魔王には程遠い。

「あははっ、魔王を志してる時点で普通じゃないって。

でも、真王ならいつか本当に魔王になれる。私が保証するぞっ！」

笑って親指を立てながら、自信満々に言い放つ楓。
こんなお墨付きを貰ったら、どんな奴でも魔王になれると勘違いしそうだ。

本当に楓は不思議な奴だ。話しているだけで自然と口に笑みが浮んでしまう。
おそらく、それが楓本来の力であり魅力なのだろう。

…だが愚かにも、楓からそれを奪っていた者共がいる。
おそらく、誰かが手を下さぬ限りそいつらは裁かれる事は無いだろう。

だから、我は楓に提案する。
愚か者共に罰を与える為に。

「楓よ。我はこれから楓の支えになると言ったな？
だが、楓が望むのならばそれ以上の存在になってもいいと思っている。

楓の望むものを与え、どんな願いでも叶える。そんな存在だ。
我ならそれが出来る。そう、楓が望みさえすれば。
さぁ、どうする楓。お前は一体何を望む？」

今の我の言葉は、さながら甘言を弄する悪魔そのものであろう。
絶望の淵に立つ者が聞けば思わず縋ってしまう程に甘美な誘惑。

それを聞いた楓は、

「ない！」

僅かな逡巡も無く即答した。

「別に真王の言ってる事を疑ってる訳じゃないよ。真王がそう言うのなら、本当に出来るんだろうし。

でもさ、何でも叶う人生なんて私は欲しくないよ。きっと、真王に会う前の私ならそれを望んでた。

だけど、真王は変えてくれた。

真王と話しただけで、そんなモノいらないって思えるようになった。

私はそれだけで十分だよ。愚痴を聞いてくれて、相談に乗ってくれる。

真王はそんな誰にでもあるような些細な、でも私にとっては大きなものをくれた。

だから、私は真王に貰うだけじゃなくて、真王にも沢山のものをあげたい。

与えられるだけの関係なんて私は全然嬉しくない。

一緒に悩んで、一緒に笑い合う。真王とは、そんな対等な関係にな

りたい」

真剣な表情でそう告げる楓。
瞳は揺らぐことなく我を真っ直ぐ捉えている。

我はそんな楓の言葉に驚いてはいなかった。

奴らに罰を与えてはやりたいが、それは楓が望めばの話であり、
楓の性格からして断られるのは分かっていた。
この提案自体、楓がどう答えるのかを知る実験程度のつもりだった。

しかし、楓からは予想以上の答えが返ってきた。

我に、魔王になれると言っておきながら対等な関係を望んだのだ。
魔王と対等な存在など勇者ぐらいしか思い浮かばない。
勇者以外のそんな存在に、楓はなると言ったのだ
普通なら勇者以外に許されることではない。

だが、そんな存在がいてもいいのかもしれないな。
楓の真っ直ぐな言葉を聞いていると、それも悪くないと思えた。

そんな我自身の考えが可笑しく、思わず笑みが零れる。

しかし我のそんな笑みに、楓は少し不機嫌そうに口を尖らせていた。

「うぅ～酷いよ、笑う事ないじゃんかぁ。

そりゃ、初対面のしかも小学生に言う事じゃないけどさっ。

…でもね、私は小学生相手だからって容赦しないよっ！
いつか、参りましたって言わせて見せるんだからね！」
不敵な笑み浮かべ、宣戦布告する楓。もはや目的が変わっていた。
そんな楓を見て、やはり笑ってしまう我。
今の我なら箸が転げるだけでも笑ってしまいそうだ。
くくっ、本当に恐ろしい奴だ。
我をここまで苦しめるとは、楓はある意味勇者なのかもしれない。
そんな風に笑いに苦しむ我を見て、再び不機嫌になる楓。
おっと、そろそろフォローしておかないと不味いな。
「ふふっ、楓よ。気分を害したのなら済まなかったな。
別に我は楓の言葉を馬鹿にしている訳ではない。
むしろ、悪くない提案だと思っている。我は魔王になり、楓はそんな我と対等になる。
まぁ我が魔王になるのは確定しているから、後はお前の努力次第だ。
精々頑張る事だな」

結局、半笑いのままでの言葉となってしまった。
締まらないが、こちらの方が楓への答えとしてらしく思えた。
楓には真面目な雰囲気よりも、思わず笑ってしまう今の方が似合っている。

そんな我の想いが伝播したのか、楓も可笑しくて堪らなそうな笑みを浮かべる。

そのまま楓はブランコから飛び降り、我もそれに追従する。

「あははっ、もっちろん！

私は真王が思ってるより手強いんだから、覚悟しとけよ！」

楓が宣言し、二人で笑みを浮かべながら無言で対峙する。

「……くっ、ふはははっ」

「……ぷっ、あはははっ」

ついには雰囲気に堪らず、二人して笑い出してしまった。

それから二人して笑い合っていたが、次第に苦しくなり笑いも治まってきた。

そんな時、苦しそうにしながらも楓が話し掛けてきた。

「あははっ、はぁ・・はぁ・・・あのさっ、私聞きたい・・・ことが有るんだけど・・・」

「ふははっ、はぁ・・はぁ・・・何だ・・・？」

今このタイミングで質問とは自重して欲しい。

一体どれだけ重要な事なんだ？

「魔王って何？？？」

首を傾げ、心底不思議そうに言う楓。

楓のその一言に我の時が止まった気がした。

思わず項垂れる我。今までのやり取りが全て徒労に終わった様な気がする。

その後一時間を掛けて魔王について語る事となった。

魔王談義はいつもなら楽しい筈なのだが、今日程虚しい日は無い。

…楓恐るべし。

第六話　公園での語らい（後書き）

どうもＴＳです。展開遅くてすいません。
本当はこの六話で家に帰った後の話を書こうと思ったんですが、気が付いたら楓との会話をずっと書いてました。
次こそは新しいヒロインが出ると思います。なので、次も読んでもらえたら嬉しいです。

読者様、お読み頂き有難う御座いました。

第七話　来訪者

日も暮れかけ辺りが暗くなるような時間、我と楓は未だ公園にいた。

「へぇ～。つまり、魔王って世界で一番偉い人なんだ」

感心する様に頷く楓。そんな楓に対し我は

「…はぁ。まぁそんなところだな…」

と、やや疲れたような返答しか出来なかった。

一時間をかけた我の説明は楓にほとんど理解してもらえず、今の台詞に至る。

世界で一番偉い人。これだけなら数秒で済む説明だ。

我の一時間は一体何だったのだ…？

我が徒労に項垂れていると、そろそろ帰らないと不味い事に気付いた。

我は下僕の部屋の鍵を強奪、もとい預かっているのだ。

我の帰りが遅ければ、下僕も扉の前で途方にくれるだろう。

扉の前で惨めに座って待つ下僕……楽しみが一つ増えたな。

とりあえず最後に、聞きたい事を聞いて帰るとしよう。

「それで、楓は今の話を聞いてもまだ我が魔王になれると思うか？」
答えは何となく分かっているが確認しておく。

「うん、真王なら立派な魔王になれるよっ！私も頑張るから、真王も頑張ってね！」
予想通りの返答に苦笑が漏れる。ここまで迷いなく返されると清々しいな。

「あぁ、当然だ。お前もくだらない奴ら如きに負けるなよ。
もし、それでも負けそうになれば我に頼れ。力になってやる」
そう言って、楓に携帯の連絡先の書かれた名刺を渡しておく。
我はそのまま楓に背を向け歩き出す。

「真王っ！ありがとね、私負けないから！」
楓が大きな声で我に呼びかける。
暗くて見えないかもしれないが、我はそれに軽く手を振るだけに留め公園を後にした。

＊＊＊

その後、ゆったりとした足取りで我は下僕の家へと向かう。
我が下僕の部屋の前に着いた時には、案の定下僕は足を抱え蹲っていた。

「下僕よ、そんなところで蹲ってどうしたのだ？寝るのなら部屋で寝た方が良いぞ」

我には一切関係ないといったように振る舞い、優しい声音で下僕に語りかける。

そんな我の言葉に反応し、勢いよく顔を上げる下僕。
その瞳には若干涙が溜まり、我の登場に安堵した表情を浮かべる。
ひょっとしたら、我の事を心配していたのかもしれない。

そんな下僕の殊勝な様子に僅かな罪悪感を抱いていると

「こ、こんな時間までどこ行ってたんですかぁ！

神裂君だから別に事故とか事件とかの心配は無かったですけど、

私は部屋に入れず、近所の人から変な目で見られて大変だったんですよ！」

我の心配など全くしていない発言をする下僕。
こんな馬鹿に罪悪感を抱いた我が愚かだった。

確かに自業自得だが、心配ぐらいはしてくれても良いのではないか？
そんな事を考えながら無言で下僕を見ていると、下僕が説教をし始めた。

「そもそも神裂君は自己中過ぎなんですよ。いつも、自分勝手で――
って、何で勝手に部屋に入ってるんですか！？ちゃんと聞いてください！

まったく、続きは部屋で……あれっ、私はまだ入ってないですよ。
どうして扉を閉めるんですか？ちょ、ちょっと鍵までしないで下さい！

こっ、こら開けなさい！仮にも神裂君の先生ですよ。その上ここは私の部屋です！

神裂君開けて下さい！……神裂君？いますよね？……え～っと、先生もちょっと言い過ぎたかもしれません。

さっきの事は謝ります。ごめんなさい。だから、開けてもらえませんか？もしも～し、神崎く～ん。

聞いてますかー……？……そうですか、聞こえてないんですか…。

……神裂君のばーか。

……ひっ！？う、うそですっ！すいませんでしたっ！！反省してますぅ！

うぅっ…お願いですから開けてくださぁい…」

得意げな顔の下僕を無視して部屋に入る我。
そのまま鍵を掛け下僕を閉め出す。
何やら喋っているようだが我には関係が無い。

……我を罵倒した罪は重いぞ、下僕よ。

その後すすり泣く下僕が鬱陶しかったので、中に入れてやった。
中に入った途端泣きやむ下僕。

…もう一度締め出してやろうか？

「あ、あぁ～ご飯作らないとですよねー。

神裂君もお腹空いてますよねっ。今日は豪勢にしますよぉ～」

そんな我の考えに気付いたのか、わざとらしく奥に逃げる下僕。
まぁ、今はいいだろう。
後でじっくりとお仕置きをすれば良いことだ。

それに、実は我が唯一下僕を買っているところがある。

それは料理の腕前。
下僕の料理の腕には、我でさえ敵わないと思っている。
それが毎日食べられるのだ。機嫌も良くなるというものだ。

大人しく料理を作る下僕を弄りながら待つとするか。
そう思い奥に向かおうとした瞬間、インターホンが鳴り響いた。
こんな時間に来客か？

下僕の交友関係に興味を持った我は踵を返し、扉に手を掛ける。
奥から焦った様な足音と、咎める様な言葉が聞こえるが無視をする。

くくっ、これで、男だったらどうしてくれようか…？等と不穏な事を考えつつ扉を開ける。

しかし開けた扉の向こうにいたのは、我の良く知る存在だった。

「……なぜ、お前がここにいる？」

理解出来ないといった様子の来訪者を見て、我に笑みが浮かぶ。
弄りがいのある奴が来たことに喜びつつ、これからの事を考える。

……さて、こいつはどう料理してやろうか？

第七話　来訪者（後書き）

またもや話が伸びて展開が遅くなってしまいました。
皆様は作者のように計画の立てられない駄目人間にならないよう気を付けてください。大きくなってからとても後悔します。

それでは、読者様ありがとうございました。

第八話　口撃

下僕の部屋の玄関先で、我と来訪者は対峙していた。
来訪者は、我が何も言わないのが気に食わないのか目を細める。

「もう一度聞くぞ…何でお前がここにいる？」

来訪者の威圧するような物言いに、我が返答しようと口を開きかける。
しかし、後ろから現れた下僕が焦るように言葉を重ねた。

「ぅわ、わぁ～、どうしたんですかぁ恵。こんな時間に～」

「どうしたって、静香の家に今日行くとメールしたんだが……
それに何でこいつがここに――――」

「えっとそれは――――」

来訪者は我を忌々しいものでも見るかのような目付きで睥睨する。
おそらく、扉の前で途方に暮れていた下僕はメールを確認していなかったのだろう。
突然の来訪者に焦った下僕は、我が何か言いだす前に言葉を被せようとしている。

だが、下僕の分際で我の言葉を遮るとは笑止千万。
我はこれ以上、下僕をのさばらせないよう先に言葉を紡ぐ。

「こいつとは随分な言い草だな。仮にも生徒への呼称ではないだろうに」

来訪者を嘲るように言葉を浴びせかける。
我の言葉から分かるように、来訪者は我が学校の教師である。
といっても、教科担当ではなく保健医だ。
保健医、大塚（おおつか）　恵（けい）。
さばさばとした態度と男らしい物腰。
それに整った中性的な容姿も相まって、女生徒から多大な支持を受けている。
仮病を使い、保健医に会おうとする者もいる程だ。
我の言葉に腹を据えかねたのか軽く睨み、不機嫌そうに口を開く保健医。

「ふんっ、静香を下僕扱いするお前なんて“こいつ”で十分だ。
何でここにいるかは知らないが、とっとと出ていけ」
保健医は傲岸不遜に言い放つと、羽虫でも追い払うように手を振った。

下僕と親しい保健医は我を疎ましく思っており、しばしば対立することがある。
まあ、温厚な我に保健医が一方的に突っかかってくるだけなのだがな。

まったく、大人げないな。

「我にも事情があるのだよ。それを解さず無下に追い払おうとは、最近の大人は随分と狭量になったものだな。もう一度小学生からやり直したらどうだ？

お前にはどうやら人としての――――」

「わーわー！こんな所で話し込むのも何です、奥に行きましょうか！さぁさぁ！」

そう言って無理矢理保健医を室内に引きずり込み奥へ連れていく下僕。

……ふむ、再び我の言葉を遮るとはいい度胸だな。

後でじっくりと後悔させてやろう。

＊＊＊

所変わってリビング。
下僕から我の事情を大人しく聞いていた保健医は、不機嫌そうに腕を組み我を睨んでいる。

「つまり、こいつの両親が仕事でいなくなった挙句、世話する奴がいないから、
静香の家で預かっている。とそういう訳でいいのか？」
事情を知っても保健医の我に対する態度は一切軟化しない。
これだから、頭の固い大人には手を煩わされる。

「……私はこいつが静香と一緒に住むのは反対だ。
静香に何するか分かったもんじゃないしな。
そもそも、こいつは一人で生きていけないなんて玉じゃない」
どうやら我の能力は保健医から高い評価を得ると同時に危険視されているようだ。
故に保健医は頑として己の意見を曲げようとせずソファーに踏ん反り返っている。
ふむ、仕方がない。我も切り札を出すしかないか。

保健医の親友の前でこれを使うのは心苦しいが、恨むなら己の傲慢さを恨むのだな。

ふふっ、我に楯突いたことを心の底から後悔し絶望するがいい。

「保健医よ」

「何だ！」

「小学生を視姦するのは感心しないな」

「ぶぐぉほっ！？ななな、なにを――――！？」

「まあ、独身で男日照りの保健医が飢えているのは知っているが、いくらなんでも小学生にそういった目を向けるのは問題と思わないか？」

つまり、

「そんなに、体育に勤しむ幼い子供達の姿が魅力的だったか？

まだ成熟しきってない少年達の半ズボンから覗く生足が――――」

「うわぁぁあああ！」

雄叫びをあげ床に突っ伏す。そんな保健医は、幼い少年達に心惹かれてしまう人間。

そう、ショタコンだ。

我は偶然、保健室の窓からだらしない表情で子供達を見ている保健医の姿を目撃した。

心優しい我はいつか指摘してやろうと考えていたが、まさかこんな時に言う事になろうとは。

……くくっ、ざまあないな。

失意に蹲る保健医に、我は優しく語りかける。

「なるほど、小学校の保健医とはよく考えたものだ。

身体測定は存分に堪能できたか？大変だっただろうな、何でもない表情を装うのは。

もし、このことが他の先生方に知られたらどうなるだろうな？

証拠は自宅を洗えばごっそり出てくるだろうから、解雇は免れないだろうな」

我の言葉に保健医は何も返せないようなので追い打ちをかける。

「だが安心しろ、我が下僕の家に住むことに異論が無ければ誰にも話しはしない。

さぁどうする？」

「くっ……でも静香のためにも屈する訳には――――」

それでも、首を縦に振らない保健医。

見上げた根性だが、立場を理解していないようだ。

「我の体操着姿にねっとりとした絡みつくような視線を向けていたこともチャラにしてやるが？」

「……」

「……教育委員会」

「わかったよ！もう何も言わねーから、好きにしろ！」

保健医は「くそっ！」と毒づき地面を殴打する。

我はそんな保健医を見て少し哀れになった。

なので、保健医の肩に手をやり優しい言葉を掛けてやることにした。

「返事はわかりましただろう……？」

あぁ楽しい。

第九話　魔界料理

我と保健医との友好的な取引が終わって十分。
いまだリビングには惨めな敗残者である保健医が項垂れていた。
そんな哀れな保健医に対し、下僕は甲斐甲斐しく励ましている。

「えっと、元気出してください恵。誰にだって人に言えないことの一つや二つありますよ。
それに私も子供が好きで先生になったんですから恵と変わらないです」

そんな下僕のお優しい言葉からは心配以外の感情が見受けられない。
ふむ……保健医の危ない性癖を知ってもなお態度を変えないとは麗しい女の友情だな。

どれ、少し掻き回してやるか。

「まぁ、保健医と下僕では好きのベクトルが違うだろうがな。
それに、保健医の言えないことが一つ、二つで済めばいいのだが…。

まさか小学生の姿を隠し撮りして、夜な夜なその写真眺めているわけでは――――」

「ど、どうしてそれをっ！？」

我の言葉にこれまで無言だった保健医が過剰に反応した。

冗談だったのだが……想像以上に危ない奴だな。

我はそんな保健医を、蔑むかのような眼でじっと見やる。

「うぅ、いいじゃないか……こっそりと愛でるくらい」

涙目で自身を擁護しようとする浅ましい保健医。

保健医が言う“こっそり”はずいぶんと犯罪の香りがするな。

よし、最後の追撃をかけてやろう。

「ほぉ、つまりお前は実際に小学生と仲良くしたい訳ではないと。

遠くから眺めていれば満足とそう言いたいのだな？」

「も、もちろんだ。私もそれくらいは弁えている」

「ではもしお前好みの小学生が――――

『…あ、あの先生…僕、先生のことがずっと好きだったんです。

…だ、だから先生のいうことなら何でも聞きます』と、

このようなことを言ってきても拒むというのだな？」

まぁ口では何とでも言えるから、こんな確認など意味は無いのだがな。

これ以上藪をつついて蛇が出てきても面倒なのでこれで会話を終わらせてやろう。

このままだと下僕にすら見捨てられそうだからな――――

「……」

しかし、保健医は我の考えに反して無言で我を凝視している。

こいつ、もしや我の意図気付いて――――

「な、なぁ……今の感情込めてもう一回言ってくれないか？」

鼻息荒く懇願するその姿はまさしく卑しい雌豚そのものであり、思わず顔面に蹴りを入れ思いつく限りの暴言を吐きそうになった。

「……下僕よ、そろそろ夕飯の仕度をしてはどうだ？」

「……そうですね。恵も元気出してくださいね」

我は保健医を完全にスルーし下僕に夕食の催促をする。

それを受け下僕は保健医から一歩離れて言葉をかけ、そのままキッチンへ向かった。

今の二人の距離が、見事に二人の心の距離も物語っていた。

保健医は不気味な笑みでしばらく呆けていたが、妄想の世界から脱出したのか突然こちらを仰ぎ見た。

保健医は驚いたような表情を顔に貼り付け我に質問をする。

「……なぁ、静香は今料理を作っているのか？」

「ああ、そうだ」

その言葉を聞き、保健医の顔が幽霊でも見たかのように瞬時に青ざめた。

「なっ！？お前は静香の料理の腕を知らないのか！？あいつの料理は――――」

「うむ、知っているぞ。知っているからこそ下僕に作らせている」

焦った様に確認する保健医にさらりと答えてやる。

保健医はそんな我を見て、信じられないような顔を浮かべ唇をわなわなと震わせていた。

「正気か…？」

「もちろんだ。保健医も食べていってはどうだ？おそらく下僕はお前の分も用意しているぞ」

「くっ、その前に私が止めて――――」

「皆さん出来ましたよ～」

がくっとその場に項垂れる保健医。

下僕はにこにこと大きな鍋を持って現れた。

まだ作り始めてから五分程しか経っていない筈なのだが随分と早いな。

そう思って鍋の中を覗いてみる。

鍋の中には魔界が広がっていた。

ぐつぐつと煮えたぎる鍋の中には、

鳥の足、豚足、二十センチはある魚の頭、よくわからない肉、何かの目玉。

その他にも、よくわからないものが沢山浮かんでいた。

中の液体はマーブル模様で明らかに人体に有害な成分を含んでいるだろう。

匂いも刺激臭を放っており少し嗅いだだけで顎にアッパーを食らったような衝撃を受けた。

どう見ても人間が食べられる食べ物じゃない。

食べるとしたら――――そう魔王くらいのものだ。

だからこそ、我は下僕の料理を所望する。

五分でどうやって煮込んだんだ？とか、

材料はどこの異界から調達したんだ？とか、

そもそもこれを料理と称すのは食への冒涜なのではないか？とか、
沢山突っ込み所はあるが、正に魔王が食すのに相応しい料理だろう。

保健医は既に匂いだけで泡を吹いて気絶している。

下僕はニコニコとした表情を崩さず、何でもないように鍋を持っている。

……こいつ、本当に人間か？

「あれっ、恵は寝ちゃったんですか？折角恵の分も考えて量を多めにしたんですが…。

仕方ないですね、これは私と神裂君で全部食べちゃいましょう」

嬉しそうに言う下僕の言葉が今は死刑宣告に聞こえる。

今まで我が食べてきたのは単品料理であり、
食べても精々一日中全身に激痛が走るだけだったが、
今回はそれ以上の量と質を誇っている。

流石に我でも生命の危機を感じる。
しかし、食べないという選択肢は無い。
これしきのことで逃げては魔王になるなど夢のまた夢だからだ。

「今回のは自信作なんですよ。だし汁を効かせてみました。
それに、なんと隠し味に砂糖が入っているんですよ！」
期待の眼差しを我に向け鍋の解説をする下僕。
この惨状はだし汁も一枚噛んでいるのだろうか？
後、砂糖程度ではこの面子に隠れて太刀打ち出来ないだろう。

「それじゃあ、いただきま～す」
手を合せそう言うと美味しそうに食べ始める下僕。
きっと下僕の胃袋は宇宙なのだろう。
下僕はどこかのフードファイターの妹なのかもしれない。

現実逃避にそんなことを考えるが、あまり時間をかけては下僕が怪しむだろう。
これは我が望んだことの結果なのだ。
覚悟を決め頂くとしよう。

「……逝くぞ」

腹を括った我は、箸を持ちよく分からない物体を掴んだ。

そのまま、口に含み――――

瞬間、我は魔界を見た。

＊＊＊

――――気が付くと我は病院にいた。

我の寝ているベッドの横で下僕が椅子に座っている。

我が起きたことに気づいた下僕は泣きながら我に抱きついてきた。

……暑苦しい。

泣きながら話す下僕の話を聞くと、我はあれを食べた瞬間に白目をむいて気絶したそうだ。

そして三日三晩うなされ続け生死の境を彷徨い、今はじめて目を覚ましたそうだ。

泣きじゃくる下僕の頭を撫でながら我は決意した。

これからは、我が料理を作ろう――――

第九話　魔界料理（後書き）

更新が不定期になってすいません。
全然話が進まないですね。なのに、次の話のアイデアがほとんど浮かんできません。
むしろ、これを含め現在四つ連載中の話があるにも拘らず、新しい連載を始めようかなと思ってます。
一応、一つがもうすぐ終わる予定なのでそちらが終わり次第始めると思います。
魔王様の方はまだまだ続きますので、気長にお待ち頂けると助かります。

第十話　届かぬメール

精密検査を受けた結果、異状は無かったそうなので昼過ぎには退院し今は下僕の家にいた。

…しかし、下僕の家にやってきて初日で病院送りにされるとは思わなかった。

我もまだまだ未熟ということか。

魔王になるからには、いつかあの料理を食べられるようにならなければな。

我がそう決意し家に入っていくのに対し、下僕は今にも泣きそうな顔で立ちすくんでいた。

……なんだ？

「……神裂君、ごめんなさい。私のせいであんなことになって…。

…私は先生失格です…生徒をあんな風に苦しめて――――」

そう言って顔を悲しみに歪ませる下僕。

……まったく、ずるい奴だな。

そんな顔をされたら文句も言えないではないか。

下僕を泣かせてもいいのは我だけだが、こんな形で泣かれるのは我の本意ではない。

「……お前が気にする必要はない。我自らが望んだことなのだからな。

まぁ、これからは我が料理を作るが、いつか我にまたあの料理を作って欲しい。

その時はあんな無様を晒したりせず完食してみせよう」

下僕を安心させるように優しく笑いかける。

しかし下僕は、それでも自分を許せないのか俯いてしまう。

ふむ、どうしたものか……？

「……そうだな……では、我の言うことを一つ何でも聞くというのではどうだ？」

適当な思い付きを冗談めかして言ってみる。

下僕は何を想像したのか、顔を赤くしながら小さく頷いた。

「わ、わかりました。これからは神裂君の言うこと何でも聞きます……。

それで……許してくれますか……？」

下僕はもじもじとしながらも、決意のこもった真っ赤な顔で我を見据える。

冗談で言った我の要求がなぜか通ったうえランクアップしている。

焦りすぎてまともな思考回路が焼き切れているようだ。

勿体無い気もするが訂正しておくか。

「はぁ…別に一つでいい。それより我の要求を呑んだのだからな、これ以上気にするなよ。

……それと、いつまでそこにいるつもりだ？お前の家なんだからさっさと入ってこい」

そう言って下僕の腕をつかみ家に引き込む。

そのままこちらに手繰り寄せる勢いで我の口元に下僕の耳を引き寄せ、囁く。

「なぁ、先程我の要求を聞いて顔を赤くしていたが、何を想像していたんだ？」

からかうような我の言葉に再び赤くなった下僕は、「もう、知りません！」と言って我を置いて奥に行った。

……どうやら、元気は出たようだな。

＊＊＊

我は一人、宛がわれた部屋の布団の上で横になっていた。
どこの部屋を我に使わせるかという話になった時、
下僕に「なんなら、同じ部屋でもいいが？」と言ったところ、
「……せめて、自分の部屋でくらいはくつろぎたいです…。
神裂君はいつも意地悪ですから……」
等と失礼なことをのたまった。なので、
「なんなら、ベッドの上なら可愛がってやってもいいが？」
と返したところ
「……ふぇぇぇっ！？なな、なな何を言ってるんですかー！？
ととと、とにかくここは駄目ですー！隣の部屋が空いてるんでそこを使ってください！
布団も来客用のものが押入れの中に入ってます！さぁ、行ってください！さぁ！」
死ぬんじゃないかというぐらい真っ赤な顔で動揺しながら我を追い出す下僕。
我も渋々隣室に向かい、疲れていたこともあってすぐに布団を用意した。

そして今、こうして横になっているという訳だ。
我は横になりながら、まんじりとせず先程のやり取りについて考えていた。

……意地悪だから、か。
同室を拒むのは男に対する危機感ではなく、意地悪だから。
男としてほぼ意識されていないな。
まぁ、されたらされたで困るのだが――

そんなことをつらつらと考えていると、何かの振動する音で考えを遮られた。
音のするほうを見ると鞄からだった。
そういえば、と思いだし鞄から携帯を取り出す。
やはり、携帯だったか。確認したところメールが届いたようだった。

差出人は――――楓。
そういえば連絡先を渡していたのだから、メールはずっと来ていたのだろうか？
とりあえず新着メールを確認し、

目を疑った。
そのメールには件名がなくただ一文

“死んじゃおうかな”

とだけ書かれていた。

絵文字もないただそれだけの文章が、我の不安をかきたてる。
一体楓に何があったのだろう？
そう思い他のメールを確認する。

未確認のメールは二十八件。
基からが二件、配下の定期連絡が四件。
それ以外がすべて楓からのものだった。
なぜ、あんなメールを送ったのか原因を探るため最初に来たメールを見てみる。
件名・よろしくね
　さっそくメールさせてもらったよ～
　これからもよろしくね～。
最初のメールのため短いが絵文字も使われており異常は見受けられない。
届いたのは我が倒れてから二時間程後だったようだ。
しかし楓は、その後も我の返信がないにもかかわらず健気にもメールを送り続けていたようだ。
二件目からは我の返信がないことにも触れず、日常の楽しかったことや不満なことが書かれていた。
だが二十件目あたりから、そのことについて触れるようになってきた。
“真王、なにかあったの？”
“私のこときらい？”
“一言だけでもいいんだけどなぁ”

“返信待ってます”

“真王が私に言ったことは嘘だったの？私は真王を信じたい。

でも、何も言ってくれなきゃ不安だよ。ねぇ、お願い真王答えて”

メールの内容は次第に不安そうなものに変わっていく。

楽しかった話がなくなり、後ろ向きな発言が目立つようになる。

そして

“もうどうしていいのかわからない。真王に見捨てられたらどうしたらいいの？”

このメールの次が先程のメールだ。

我は自らの額を強く壁に打ち付けた。

己の愚かさに反吐が出る。

楓は我を信じてくれていたというのに、この体たらく。

我は自身を痛め付けたい衝動に駆られるが、今はそんな自己満足な行為に身を任せる時ではない。

手遅れになる前に楓にメールを送らなければ。

件名・遅れてすまない。

楓、メールの返信が遅れてすまない。

言い訳にしかならないがこの三日程、意識不明で入院していたため返信ができなかった。

楓の力になると言った以上我は誠心誠意それに答えなければばら

ない。
なのに、我は楓の力になるどころか逆に追い詰めてしまった。
本当にすまない。
楓はこんな愚かしい我に愛想を尽かしているかもしれないが、
許されるのならばもう一度やり直す機会を与えてほしい。
我を許せないと思うならば無視してもらって構わない。

最後に、信じてもらえないかもしれないが我は楓を誰よりも応援している。
例えもう会うことがなくとも、嫌われていたとしても我は楓を応援し続ける。
こんなこと言えた義理ではないが楓には生きていてほしいし、
もっと笑っていてほしい。
すまない楓。

メールを素早く打ち終え、すぐさま送信する。
もし、間に合わなかったらどうする…？
そんな考えが頭をよぎる。

我は携帯を手に祈り続ける。

どうか間に合ってくれ……！

二十分程たったころだろうか、
我の誰に向けたかは分からない祈りが通じたのか、手の中で携帯が振動する。
はやる気持ちを抑えながらゆっくりと差出人を確認する。

楓からだ…！

件名・ごめんなさい

真王が入院してたなんて知らないで変なメール送ってごめんね。
真王は全然悪くないから気にしないで。

それより、真王はいいの？私なんかと仲良くして。
少しメールの返信が来ないだけで変になっちゃう女だよ？
私ともう関わりたくないと思わないの…？って、ごめん。
真王のメールは凄い嬉しかったんだけど後ろ向きなことばっかり考えちゃう。
真王が力になるって言ってくれたんだから信じなきゃだよね。

私、思い込みが激しくて感情の起伏が大きいらしいから、
最後のメールも勢いで本気って訳じゃないから心配しないでね。

ねぇ…これからも、真王とのメール続けてもいいかな？

それと真王、メールありがとうね。すごくうれしいよ。

楓からのメールに安堵し布団に倒れこむ。
よかった。心の底からそう思えた。
我は起き上がり楓に返信のメールを打つ。
今の楓には公園で話した時程の明るさが感じられない。
我は楓に、いつも心の底から笑って欲しいと思っている。
今は少しでも楓の力になりたい。

……本当は今すぐ楓に会ってでも話したいんだがな。

時間的に仕事中かもしれないからメールで我慢しておこう。

件名・ありがとう

こんな我を信じてくれてありがとう。
メールはむしろこちらからお願いしたい程だ。

我が楓と話したのは公園での数時間だけだが、
それだけで、我は楓のことを好ましく思った。
この者のことをもっと知りたい、もっと話していたい。
楓の笑顔をずっと見ていたい、そう思うほどに。

だからそんなに自分を卑下しないでくれ。
弱いところも強いところも全てが楓だ。
そのままの楓の全てが我にとって魅力的であり愛おしい。
だから、楓が嬉しいと言ってくれるのならば我が拒む理由などありはしない。

こんな我だが、これからもよろしく頼む。

……これで我の思いは伝わっただろうか？
まぁ、楓の返事を首を長くして待つとするか。
我は安堵と喜びに笑みを浮かべ再び横になった。

楓のことで頭が一杯で基のメールについて完全に忘れていた我は、次の日に基に怒られることになるのだがそれは次の話で語るとしよう。

第十話　届かぬメール（後書き）

更新を何とか出来ました。
引きにもある通り次の話の構想は一応あるので書き終え次第投稿します。

■（１０／１１／１６現在）
全話修正のため更新停止中です。
全話修正が済み次第、次話の文章化に着手したいと考えています。
いつ終わるのかは分からないので気が向いた時にでも確認していただけると嬉しいです。

ここまでお読みいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7544e/

魔王様は小学生♂

2011年8月16日00時17分発行